

## 「レーニンへ懾れ」について新開さんのコメントへの感想と、集会に参加した感想

2016年9月21日 大谷美芳

読むのは四苦八苦ですが、新開さんや福富さんの感想を読み、9/17 集会の発言を聞いて、「耳学問」ですが、問題の所在は大体分かったような気がします。

レーニンは哲学的に、プレハーノフなどに頼っていた段階の機械的唯物論(『唯物論の経験批判論』)から、ヘーゲルに学んで(『ベルンノート』)マルクス主義の弁証法的唯物論の段階に到達ということであり、その核心は「実践」、唯物論的作用に対する主観的反作用、主観的能動性の問題のようですね。

それを、新開さんは、「革命運動(実践)に対する実証主義や進化論、総じて自然成長的革命論が浸透していることへの批判」と言い、「グラムシが『資本論に反対する革命』から引き出したものは革命の“主意主義”であり、やがて彼とともに語られる“ヘゲモニー”の概念である。グラムシはこのヘゲモニーの概念をロシア革命とレーニンから摂取した。」と言っている。レーニンが、「社会主義革命は最も資本主義の発展したところから開始される」という第二インター的日和見主義に反対して、資本主義が後発でブルジョア革命に直面していたロシアでプロレタリア革命を目指した、その哲学的基礎の問題のようですね。

そもそもマルクス・レーニン主義そのものが、確かにプロレタリア革命の理論だが、資本主義的に遅れブルジョア革命に直面している中でプロレタリア階級が革命の徹底化を通じてプロレタリア革命へ前進することを目指す、そういう歴史的客観的な条件をもっている(普遍は特殊の中に)。マルクスとドイツ革命、レーニンとロシア革命、毛沢東と中国革命、全てそういう関係。資本主義が発展し直接プロレタリア革命に直面していた訳ではない。

民主主義革命に直面する中で、二段階革命で社会主義革命への前進を目指す主観的能動性であり、革命的实践であるが、しかし、それは個人的な主意主観ではなく、プロレタリア階級の階級闘争であり、革命闘争であり、その最高表現・集中的表現が革命の国家権力となる。哲学の問題ではなく政治の問題では、ここの所を明確にしなくてはならないと考えます。また、この歴史的客観的な条件が同時にマルクス・レーニン主義の限界となり、スターリン主義をももたらした、ここの所も明確にしなくてはならないと考えます。

レーニンは、哲学的にはどうであれ、政治的には弁証法的唯物論の主観的能動性に基づいて、1905年の革命の時点で、プロレタリア階級の階級闘争とそれに加えて当面はブルジョア革命だから農民(この場合農民全体)の階級闘争から「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」を提起している。これがブルジョア革命を徹底し、そのプロレタリア階級独裁(資本主義が発展し農民が分解し多数が貧農=半プロレタリア化)への転化が革命をプロレタリア革命へ発展させる。これは1917年の2月民主主義革命では臨時政府(これはブルジョア階級独裁)と「二重権力状況」のソヴィエトとして実現された。また10月社会主義革命で臨時政府を打倒したソヴィエトはプロレタリア階級独裁だが、それは都市だけで、農村ではまだ封建制に対する土地革命=民主主義革命が進行中なので、ソヴィエトはまだ「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」であった。

社会主義革命への前進で農業集団化と工業化が課題となったが、資本主義と正面から直接的に闘争した経験蓄積がなかったので、共産党が国家権力を掌握し、政治と経済、国家と社会の管理と運営に直面した時点で、プロレタリア階級のやり方、プロレタリア階級独裁と社会主義が実行できず、無批判に受動的にブルジョア

階級のやり方で、つまり官僚主義でやり、ブルジョア階級独裁と資本主義をやった。これがスターリン主義でしょう。

ブルジョア革命の時期は同時に工業化、近代化、資本主義化の時期。これをイギリス・アメリカ・フランスより後発のドイツ・日本のブルジョア階級は、国家権力をテコに実行したが、ソ連ではそれと同様に工業化、近代化が実行されて資本主義化した。革命はブルジョア革命に終わった。スターリンは言わばビスマルク・大久保利通でしょう。そもそも、ブルジョア革命も、英米仏の型は例外的で、ブルジョア階級が封建制と妥協し、カイゼル帝政と天皇制が絶対主義からボナパルティズム(本質的にはブルジョア階級と封建地主階級の連合独裁)へ転化し、ブルジョア革命を上からなし崩し的に遂行した独日の型の例の方が圧倒的に多い。韓国・台湾をはじめアジアの資本主義化を推進した開発独裁・権威主義国家(ここでは封建制と同時に新植民地主義に対して妥協)。スターリン主義は国家権力をテコとした資本主義化の点でボナパルティズムや開発独裁・権威主義国家と同種でしょう。

中国では1949年の民主主義革命で人民民主主義独裁(つまり「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」)が樹立された。しかし、人民民主主義独裁もまだ「官僚型国家」であり、それに頼った農業集団化と工業化は、「大躍進」で破綻した(官僚の水増し報告)。その反省から、1968年の文化大革命ではこれを解体してコンミュン・ソヴィエト型国家、「人民型国家」を樹立した。人民大衆の国家管理・運営への参加。これが実は社会主義革命であり、プロレタリア階級独裁であった。しかし、この国家の基礎である生産・産業・経済の管理・運営への労働者大衆の持続的な参加を組織できず、破綻し挫折した。毛沢東は主観的能動性を強調したが、ここで国家の問題で主観的能動性を組織できず、失敗した。

今や、ロシアと中国、アジア全体(ユーラシア大陸)の資本主義化で世界史的にブルジョア革命の時代(その中でプロレタリア革命を追求せざるをえない時代)が終わり(ソ連・東欧体制崩壊と中国天安門事件で「社会主義の崩壊」と言われていることの意味はこれ)、本格的なプロレタリア革命の時代に入っている。この中でロシア革命から100年、前の時代が残した「宿題」にどう「解答」するのか？ 政治と経済、国家と社会の全分野で、穏健であれ急進的であれプロレタリア階級・人民の闘争の言わば「全社会的対抗闘争」が自然発生的に起きる。ここで、近代的発展とか生産力発展とかを無批判に受け入れず、目的意識的にブルジョア階級独裁と資本主義の批判、プロレタリア階級独裁と社会主義の獲得という方向で理論化することになるでしょう。これが弁証法的唯物論の主観的能動性であり、これが挫折と破綻を乗り越えるマルクス・レーニン主義の発展的適用である、と考えます。

張一兵『レーニンへ帰れ』に対して、9/17集会に提出された加々美光行コメントは「現代中国における『思想構造環境』に基づく政治的『実践』は？」と言う。また『情況』誌に掲載された稲葉守論文は「現中国の生産関係の変革に関心を持たない。中国の生産力つまり中国の国力の発展に重きを置いている。」「生産関係を捨象した生産力理論である」と言う(この人は毛沢東思想？)。中国において弁証法的唯物論の主観的能動性を発揮したマルクス・レーニン主義の発展的適用をしなくてはならない、ということでしょう。